

發言型態と聽取型態並にその藝

術的展望

中 井 正 一

Logical, cave grammaticam! 論理よ文法に心せよ。ウインデルバンドは古き言葉を云ひ更へてこう云つた。

文法、それはしかし言葉の Postmortem である。ソツシユールが言語と言語活動を注意して區別せし事が正當であるならば、論理は文法に心すべきであると共に、その生けるすがたである言語活動に向つてその誘惑の危険と共に又その深い交渉に更に心すべきであらう。

フンボルトは言葉がエルゴンではなくして、エネルギーであること云ふ意味で最も早く言語活動に注意を向けし人である。彼の言ふ内的言語形式と外的言語形式の區別はシュタインタール、ラザルス等の人々によつて、種々の解釋を受け、カツシラに至つてはそれをコーヘンの根源的能産點に關聯して解釋せんとし、マルテイー

はそれをブレンターノに根ざす心理的聯想作用として解釋せんとすら試みてゐる。ソツシユールの言語活動への關心は内外の形式の區別と云ふよりも、能動的發言作用と所動的聽取作用に重心を置いてゐる。これは言語の型態の一つの軸、或は一つの方向の設立として興味深い。

前の言語活動の内外兩形式の軸に論理學——ウインデルバンドの言へる意味に於ける近世論理學——を結付けてその新しき領域を否定判斷論の上に展かんとした人は惜くも年若うして死んだライナツハであつた。後の發言と聽取の軸に思惟の關聯せる事を氣付いて、そしてこの方向への出發線を描いた人はハイデツカーである。

今や言語活動は只論理の世界に於いて關心さるべきのみならず藝術的領域に於いて、殊に文學の形式の問題に於いて、より深い關心が必要とされる。そして論理が言語活動に關聯を持つにあつて、その二つの領域の造つた一つ一つの稜は又藝術的領域に何物か深い關聯を持つ様に思はれる。私は先づそれが論理に於いて持つた關聯にこの小論の出發點を置きたい。

言語活動を論理に結付けたライナツハの否定判斷論を顧るにあつて、彼以前の

否定判斷論に大體五つの區別を爲すことが出来るであらう。カントが彼の先驗的論理學によつて、アリストテレスの名に於ける形式主義を克服せんとする運動の導火線を與へながら、しかも彼の先驗的分析論の企圖の「手引」をその當の形式主義に取り、その大部分文法的見地によつて分類されたる範疇表を彼が範疇表に適用せし事は充分に反對さるべき理由があつた。近世の否定判斷に對する論争は殆んどこの範疇としての否定判斷への反省に基いてゐる。(一)

フイヒテの知識學よりヘーゲルの論理學に至る同一哲學一般の形而上學的否定論はこのカント哲學の修正——少し急がれたる——に外ならない。近時獨逸論理學はこの修正への更に反動として現はれる。否定は何ら實在的關係例へば分離「Trennung」と云ふ如きものではなくして、單に意識の關係形式であると考へる、この考へ方が更に三つの方向に分たれる。シグワルト、ロツチエに於ける如き、否定は肯定判斷の拒否であると云ふ意味に於いて、第二の判斷であると云ふ二重判斷説としての否定論はその一つである。Die Copula ist nicht der Träger, sondern das Objekt der Verneinung (二)と云ふシグワルトのこの *verneinung* の作用は只表象結合の上に於いてのみ問題とされる。しかし、反之ウインデルバンド、リツケルトもそうであるが——に於

いてはその同じ作用が何物か價值の上に於いて問はれたるものゝ答として問題と成る。例へば私達の知覺作用を、此薔薇は白いと云ふ判断によつて現はすとすれば、其時思惟されたる表象結合は何等先行されたる問なくして肯定せられる。反之、此薔薇は赤くないと云ふ時には、出來上つた知覺に赤なる表象が附加して、此薔薇は赤いだらうかとの間が先づ作られる。然る後にこれが追加的に評價せられて否定せられる。否定の前に先づ問があらねばならぬ意味でウインデルバンドはシグワルトの否定判断の二重性を許容する。しかもそれは問に對する評價的回答の意味に於いてある。 *Alle Verneinung sind Antworten : aber viele Bejahung sind es nicht.* (三) 名づけ得るならばそれは否定を二次的評價と見る立場である。

最後にウインデルバンドによつてそれがベルグマン及フォルトラエの實踐的機能としての欲求或は意志に關聯をもつと云はるゝブレンターノの否定判断論がある。ブレンターノは心的作用を三つの分野に分つ。「表象」と「判断」と「愛憎の現象」が即それである。「表象に於いては何物か表象せられ、判断に於いては何物か是認或は否認 *anerkennen oder Verwerfen* せられ、愛に於いては愛、憎しみに於いては憎み、慾求に於いては欲求せられる…(四) そして「判断」と「愛憎の現象」の間には深い數々の相似が

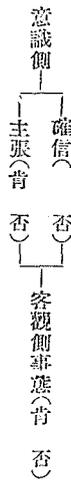
數へられる。(五) 卽フォルトラグ(六)に於いてそれがそうであつた様に否定は意志一つの衝動であると云ふ否定衝動論とも云はるべきものがそれである。かくのしてカントの意味の否定範疇論、同一哲學に於ける否定實在論、シグワルトに於ける否定二重判断論、ウインデルバンドの意味の否定評價論、ブレンターノの意味の否定衝動論等々の論争が時に副ふて打重つてゐる。しかし、こゝでも浪漫的イロニーは寂しく微笑むであらう。否定の論理はついに自らの否定を克服することは出来なかつた。

ライナツハの否定論の特質は此等の否定論が未だ問題としなかつた處の、判断を「確信」*Überzeugung* 及び「主張」*Behauptung* の二つの領域に於いて見る事である。(七) 卽判断を内なる自らに語る言葉と、外なる他に語りかける言葉に分つて、その各々の方向に於いて命題意味の差異を検討し、並にその否定判断への反映を明かならしめんと試みた事にある。

彼はウインデルバンド並にブレンターノが判断の強度 *Intensität* について説いてゐることによつて、その判断論は只「確信」の判断を視界に置けるのみで、「主張」の判断については關しなかつたと考へる。何となれば「主張」に於いてはその意味に於ける強

度を思惟することが出来ないから。そしてウインデルバンドで Billigung と云はれ、プレントナーノで Anerkennung と呼ばれるものゝ中に同様に混同せられたる區別さるべき二つのものを指摘する。即それは同意的是認 Zustimmungsanerkennung. と判断的是認 urteilende Anerkennung である。同意的是認は判断的是認の是認である。前者は主張の領域に於ける是認であり、後者は確信の領域に於ける是認である。

この主張と確信の二領域に於いて、前者は單純なる主張と、論争を目圖する主張に分れ、論争は對手の承認の要求をもち、従つて對手の確信にまで連續する。(八) この主張と確信の二領域は彼が獨特の判断構造に於ける意識側 Bewusstseinsseite の事態と對象側 gegenständliche Seite の事態と組合はされる事によつて、



この六つの要素をもつ八つの組合せを生ずることゝ成る。(九) その一々についてこゝに研討する事は今は餘りに深入りする事と成るであらう。只この主張と確信の二領域に於ける否定性が過去の否定論に如何なる關聯をもてるか、そしてそれが言語活 動論理の關聯の上に如何なる關係をもてるかを研討すれば足りる。

プチアーがそれを指摘せる如く、ギリシャ人は「合理的思想」としてのロゴスの働きを「合理的言説」^{スピーチ}としてのロゴスの使用と不可分であると考へ、知識の材料の上に形成的に働く心の働きは、二つの人格的な智慧の衝突なくしては、即心に對する心の働きかけ、問と答の交換、會話による思想交易なくしては、殆んど充分に腕をふるふことが出来ぬと考へた、彼等は寧ろ聲高く考へつゝあつた。彼等にどつては書くことが野蠻人の仕事であり、ポイニケー人の傳へる「ポイニケーの符徴」であつたのみならず、準備せられたる演説すらもが「書物の如く拙悪であり、それは涯しなく連つて思想の交換を奮いたてない。それらは疑問を問ひも答へもしない、一度たゞかれると手をその上に置くまでいつまでも響いてゐる青銅の壺或は鍋にすぎない。(プロタゴラス(三一九A)プラトンに取つては、眞理は常に新しい形を取るプロテウス、只熟練と忍耐をもつて、^{デイアレクタイク}辨論の烈しい取組みによつて、論議の興奮によつて奪取せられねばならぬものである。このプラトンのデイアレクタイクの意味は彼のレトリイクと對立して、前者は「全ての科學の冠石」^{共和國五三四}であり、後者は只「政治學の一部の影」^{ブルギア四六二}にすぎなかつた。アリストテレスはこの二つのものを思惟なる頌歌の二つの合唱者と考へた。そしてリュケイオンの彼の生活様式に於ける、午前中の

選ばれたる弟子と共になす「散歩上の會話」と午後の一一般の人々になした比較的平易なる講述は、その二つのものゝよき對比をなした。この心に對する心の働きかけ、問と答への交換、會話による思想交易である意味に於ける *Dialogik* が、浪漫主義の所謂 *Dialogik* に轉ずるには二千年の時と、「言はれる言葉」より「書かれる言葉」に更に「印刷せる言葉」への言葉の運命の推移と、更にヘレニクに代ふるヘブライの思考法と、更にそれに加はる前者の復活即バルメニデス、ツエノー、ヘラクライトス等の再生の如きものが渾然と流れ交つてゐるであらう。そしてその結果は、「外なる言葉」としてのデアアレクテイクの「内なる言葉」としてのデアアレクテイクへの轉生と云ふ興味深い現象として私達の前に提出されてゐる。(十)

この歴史的回顧にあつて、かのギリシャ思潮を背景としたアリストテレスの範疇論へのカントの曲める模倣、その急がれたる浪漫主義の人々、フイヒテ、ヘーゲルの修正、その所謂デアアレクテイクの實在的分離としての否定性等の間には限りない問題が胎まれてゐる。かの範疇的否定論と實在的否定論の間には、未だ明瞭ならざるものがあるが故に尙更解釋の對象と成る。唯一般の解釋がギリシャの意味に於ける思想交換の會話としてのデアアレクテイクに於ける否定の意味について餘り

にも無關心であつたに對して、ライナツハが外なる言葉としての「主張」と内なる言葉としての「確信」の二つの領域に於ける言語活動の上に思惟を顧みたる事は、否定論の一つの重要な解釋の仕方であるを失はない。しかし、是等の點に彼は意識的に觸るゝことなく、只シグワルト以後、ウインデルバンド、ブレンターノの三つの否定論に視點を向けてゐるのみである。只それ等は、私達に残されたる問題なのである。

シグワルト、ウインデルバンド、ブレンターノの三つの否定論の態度は、その三者共に「主張」としての判斷領域を問題にせざる事によつて、否定の二重性は即意識層に於ける二重性であつて反省面に映されたる判斷への新しき判斷、或は評價、或は愛憎に似た諾否であるにすぎない。反之、ライナツハはその二重性を社會層にまで迫り、人と人との二重性に連續せしめやうとする。ist er nicht ja ja nein に連續せしめる。この「單なる意識層」と「社會層」に迫れる意識層の兩者を區劃する中間者である意味で判斷は機微な構造をもつことゝ成る。

かく考へる事によつて、シグワルトの表象相互の關係に於いて、否定が肯定判斷の更に省られたる判斷であると云ふ考へ方は、一つには意識の内面に於いて異なる層に互れる二次限的判斷であると共に、他は一人の人の判斷的表現としての主張が、他

の一人の判断的意識の上で拒否せられて、その表現としての否定的判断でも有得るところの二つの層に於ける二重性として問題と成る。即問題は今一つ深刻性を加へて来る。ウインデルバンドに於ける「問」に對する「答」としての意味の否定性は、それ自身に擬人主義的進み方をしてゐるとともに、意識の内面に於いて、肯定が一度その所謂無關心の蓋然性即「問」の中に促へられ、それに對して、新しき論理の層即否定があらはるゝ關係には、餘りにも深い相似を、人と、人の社會的會話の構造の上に持つと共にその解體を要求され始める。ブレンターノの是認と非認に於いてもライナツハの加へし同意的肯定と判断的肯定の二つの區別は、その是認の意味をして、それがあつたよりもより深い混亂の中に投げ込まれしめる。

ライナツハは「公民權のアプリオリ」としての基礎づけの論文の中に、體驗を二つに分つて、關係主觀の同一である自我の領域と、異なる關係主觀の體驗であるところの fremdpersonale Erlebnis の領域を分つ。そして一つの主觀の、他の主觀に對してもつところの了解の要求を、凡ての社會的作用の絶對的な本質であるとする。十二、關係主觀の同一である自我の内面に於いては、事態に對して或確信をもつことが出来る、そして又それを主張に轉ずる事はできる。しかし未だ只同意を得ることを Mitteilung だけ

はできない。自分自身への主張は未だ内在的である。それは本質的に他への了解の要求に傾く。この「同意」に至つて始めて、彼の社會的・法律的關係の領域に於いて「Sitt」に深い關聯をもつ「ja」「ja sagen」となるのである。^(十二)しかしそれはすでに社會的關係領域である。この「同意」にまで接してゐるところの主張及確信が即論理判斷そのもの領域である。

この意味で彼は主張判斷と確信判斷を社會的領域にまで肉迫せしめながら、しかしそれが論理であるためには社會的領域である同意の現象と混同せしめない様に深い注意を拂はなければならなかつた。しかしこの事は主張判斷と確信判斷を同一主觀領域に閉じこめなければならぬ必要を生ずる事によつて「物」即「彼」が云ふ「Da」或は「Sachverhalt」に向つてのみ判斷はその眼を展かなければならなかつた。この事は否定判斷にとつては、注意されることによつてまねかれたる一つの過誤を獲たのではあるまいか。すでにウインデルバンド及フォルトラーゲによつて、それが内面的ではあるにもせよ問にまで否定判斷が連続せしめられてゐる時、關係主觀の異なる領域に於ける判斷の關係に向つて眼を閉づる事は殊に問題が否定判斷である意味に於いて寂しい。

私はライナツハの所謂“da”の意味をかのハイデッカーの“Da”の意味に擴げることによつて、即換言すれば、ライナツハの“da”をハイデッカーの Umwelt に於ける *Zoug* に狹め、しかもその傍に *Miwelt* に於ける *Dasein* を許容することによつて、(十三)ライナツハ自身の主張がその完きを得るのではあるまいかと思ふ。この事はライナツハに於ける「確信」*Überzeugung* に二つの方向を持たしめることである。即それは「主張」の根柢に於つて、他の主觀の同意を要求する出發點としての確信と、只無關心なる意識主觀が他の意識主觀より同意を要求せられたる主張に對して、それを了解せんとする場合の、その目的地、歸着點としての確信の二つである。一つは主張の發言者の出發點としての確信であり、他は主張の聽取者の歸着點としての確信である。こゝに至つて初めて、内に語りかける言葉と外に語りかける言葉の二つの方向をもつ言語の型態の軸の外に、能動的な發言の型態と受動的な聽取の型態の二方向をもつところの軸に問題が關聯をもち來る。ライナツハに於いても、この二つの確信のあることについて氣はついてゐたけれども、(十四)その嚴密なる區別と、その過程については觸れることをしなかつた。しかし、集團の思惟が私達の批判の對象となりつゝあるとき、今その事は瞰過さるべきものでないと思はれると共に、否定判斷にとつ

ては寧ろ最も重要な問題となり來る。

ウインデルバンドは判斷の確實性の強度の漸層性を圖式的に肯定及否定判斷にあてはめて、完全な確實な兩端(肯定、否定)から次第に其度を弱めるに従つて、強度は肯定も否定も現はれてゐない無關心點インディフェレンツポイントに近づく。論理的評價の目盛の此零の點は判斷の性質論にとつて全く重要な意義を有してゐる。何故と云ふに夫れも亦一義的でないからである。即肯定的反應と否定反應との間の無關心インディフェレンツは此場合絶對的か、もしくは批評的かであり得るからである。絶對的無關心は一般に未だ判斷せられてゐない時に存する。然し批評的無關心は、完全な論究の後肯定も否定も又同様に保留せられる時に存する。」と云ふ。そしてこの「絶對的無關心は唯、問ひの場合にのみ現はれる。問ひに於いては表象結合は云はゞ單に試作せられてゐるに止まらずして、完成せられてゐる。それから其表象結合は眞理價値の評價と關係せしめられるのであるが、然しこの評價のみが未だ完成せられてゐないのである。」この評價の明瞭な中止、それを彼は蓋然的判斷プロブレマティッシェウルタイルと呼ぶのである。(十五)

私達はこの蓋然的判斷の一つの明瞭なる例證を、一つの命題の主張に對する聽取者の意識に見出して悪いであらうか。その命題について未だ問題としたことのない

い者が突然他者によつて一つの命題を提出されたる時、そこにあるべき無關心的蓋然性、即表象の組合せとしての意味だけあつて、評價、或は志向性に於いて判断中止の状態に置かれてゐる純粹なる記述態は、即聽取者のもつ判断構造である。この判断構造のもつ意識方向が即了解 *Verstehen* の現象であり、その方向の歸着點が即受動態に於ける確信 *Überzeugung* ではあるまいか。

かゝる考へ方を許すならば否定性の根柢は、再びギリシヤの *Stoaektik* に奪回され、浪漫主義の *Dialektik* の否定性の根源である分離 *Trennung* はそれがあつたよりは更に異なる意味で問題と成り來ることゝ成る。ライナツハの所謂社會的構造の絶對的本質であるところの、他人に了解され、たき要求に對して、その聽取者の蓋然的判断の中にある無關心性、換言すれば完全に確實な肯定及否定の兩端に次第に其度を強め行くその兩方向に可能性をもつところの無關心點に否定性の最後の根據があるのではあるまいか。そして最も重要な事はその無關心性が他なる者に對してのみあるのではなくして、自我の内面にも亦、他なるもの、限りなき無關心者として存立するのであるまいかと云ふ事である。即外なる言葉としての主張の彼方に私達の見出す無關心性の外に、又内なる言葉としての確信そのものゝ、そのもう一つ深底に、

畏るべき存在として、分離されたる自我が涯もなき無關心性をもつて黙してゐるのではあるまいか。我々は外なる言葉に於いて、又内なる言葉に於いて、二つの孤獨をもつのではあるまいか。外と内の二つの唇に冷いものを味ふのではないか。

その事は、私達は私達の中にも、又、聽取者をもつてゐると云ふ事である。私達の一つの肯定はこの内と外の二つの聽取者の無關心性、その意味に於ける問ひの中に包まれる。その二つの分離の意味に否定の根據があるのであるまいか。かゝる意味でライナツハの主張と確信の二つの領域はその解體を要求され始めると共に、ハイデツカールの問ひ、Frageの意味、その根柢にある隔離、Entfremdungの意味が深い興味の対象と成り來る。

註

- (一) W. Winderband, Beiträge z. Lehre v. Negativen Urteil, S. 167—8.
- (二) C. Sigwart, Logik I, S. 162.
- (三) ibid. S. 177
- (四) F. Brentano, Psychologie v. u. s. I, S. 125
- (五) ibid. § 5.
- (六) K. Forthage, System. d. Psychologie n. e. W. I Sgr.

(未完)

- (七) A. Reinach, Gesamm. Schriften, S. 56—8.
- (八) ibid. S. 110.
- (九) ibid. S. 96—97.
- (十) 哲學研究、第十三卷第四册、「言語」參照
- (十一) ibid. S. 110—112.
- (十二) ibid. S. 205.
- (十三) M. Heidegger, Sein u. zeit, § 3—§4.
- (十四) ibid. S. 97, S. 94.
- (十五) ibid. S. 187—190. (技、清喜民譯參照)